大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

米国スタンフォードから遠隔授業

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 谷塚, 昇 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/10940

米国スタンフォードから遠隔授業

谷塚　昇†

学際領域の研究教育を重んじる総合科学部では、「総合教育研究」のプログラムによる1序論・5講義・5ゼミナール計11科目が開講されている。各科目は文/理系学科に跨る複数スタッフ（5～10名）が講義を分担し、文/理系学科の学生が入り交じって受講する仕組みになっている。

さて、私が1998年度後期の1ゼミナール「情報と社会」のディレクターを担当することとなったが、スタッフの一人、船山仲他教授（言語学・自然言語処理）が米国スタンフォード大学への在外研究員に決定し、船山氏担当の講義をどのように取り扱えば良いかの問題が出てきた。私は1996年度に1年間在外研究員として英国での生活を経験させていただいた。その間電子メールによる通信などによって情報・通信技術の発展の恩恵を大いに被った。船山氏は、総合情報センター後援による、あるシンポジウム(1996年9月)の司会で東京・大阪間を結ぶ遠隔会議システムの使用を体験しており、システム開発者の田村武志教授より外国からの遠隔講義のアイデアを得た。そのような経緯を経て総合教育研究運営委員会の承認をいただき、11月9日にスタンフォード大学から、米国出張中の船山氏が遠隔講義を行う事と決まった。

総合情報センターおよび同センター田村教授が授業場所（三階会議室）および設備使用・システム運用を全面的に支援して下さり、遠隔講義支援システムを使った米国からの授業が実現した。スタンフォードと堺間のディジタル情報の通路はISDN(サービス総合ディジタルネットワーク)二回線である。これにより音声・動画像の実時間・同時双方向通信が実現できる。

船山氏は「ディジタル化された言語情報（文字）は、コンピュータとその世界的なネットワークでつながった社会にどのような影響力を持ち、社会と世界にどのような変化を及ぼすのか。」という内容の講義を行ったが、学生とは講義前日まで電子メールのやりとりによりクラス内にある程度の共通土壌を準備していた。学生４２名出席（出席率９３％）、事務局次長、総情センター事務長、情報システム部長、総合科学部学部長、同事務長、遠隔授業の実現のために係わった事務・技術スタッフの方々合わせて、１０数名の傍聴者があり、緊張感と熱気に包まれた遠隔授業が1時間続いた。運営委員会から、折角外国より講義するのだから現地の教授に話していただく機会を作ればとの提案があり、スタンフォード大学のProfessor Stanley Peters（言語学）の出演も実現し、船山氏の通訳で話していただくことができた。

以下は遠隔講義を担当した船山氏の感想である。「通常の授業よりも学生が私の話をよく聞いてくれたような気がします。相手が見えればカメラに向かってしゃべることも自然にできますし、こちらの映像を自分で操作することによって、聴衆の焦点をこちらで絞れることも効果的な授業につながるように思いました。ただ、映像操作をやりながらしゃべるのはとても忙しいですし、少し馴れる必要があります。実は、今回は文書カメラに資料をおくのはアシスタントの私の娘にやってもらいました。これは手元だと照明がうまくいかなくてそうしたのです。」学生との電子メールによる通信について、船山氏は「e-mailという媒体については、ほぼ全員が期限内に送ってくれて、もうe-mailも通信手段として定着しているのだな、ということを実感しました。」と語る。

学生の良い反応は雰囲気で理解できたが、ある学生は「週に一度ぐらい、11月の船山先生が行ったような授業が受けられるといいと思います。」と後日のゼミのレポートに書いている。世界中に張り巡らされた各種の情報通路とマルチメディア情報処理装置を利用し、世界の異なった地域・異なった文化の人間や情報を、教育の場で実時間・同時双方向通信的に学生たちと共有することの楽しさ、想像力の広がりを経験した。教育の場に、便利な道具を使って海外に開かれた場を徐々に形成して行くのは、国・経済・文化がボーダーレスに向かって進行しつつある現在、これから社会の構成員として成長していく若い人々のために必要である。

†総合科学部数理・情報科学科助教授